

真・ゴジラ

GAP

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【あらすじ】

近未来。ロボット工学及びエネルギー工学の権威であった早乙女博士は宇宙から降り注ぐ未知のエネルギー「ゲッター線」の採取に成功する。しかしそれは、地球に思わぬ危機と戦乱を呼び引き金となった。

ゲッター線を取り込み、異常進化した地球外生命体「インベーター」が地球に襲来。早乙女博士の開発したゲッターエネルギーを増幅する「ゲッター炉心」を狙い、研究所のある浅間山を中心に出現するようになる。これに対し早乙女博士は戦闘マシン「ゲッターロボ」でインベーターを迎撃し、殲滅に成功。さらにインベーターと呼応するよう

にして現れた恐竜帝国との戦いにも勝利し、同盟を結ぶことに成功する。

この戦いで早乙女博士はインベーターのような宇宙からの脅威や、地球に潜む人類の敵となる者の存在に気づき、ゲッターロボの更なる開発と研究を進めようとするが、ゲッター線の持つ危険性を重く見た日本政府の圧力により、学会を追放されてしまう。

この行動に怒りを感じた博士は研究所を要塞に改造し、日本政府に宣戦を布告。のち「早乙女の乱」と呼ばれるテロを巻き起こす。このテロに対し、かつてゲッターロボに乗り、インベーター及び恐竜帝国と戦ったゲッターチームが立ち上がるが、その際に起きたゲッター線の暴走事故によって研究所は廃墟と化し、ゲッターチームのリーダーだった流竜馬が行方不明となってしまう。

その後、早乙女博士の言った通り、ギャオスやレギオン、「使徒」といった人類の脅威が次々と出現。さらにその混乱に乗じて秘密結社「BF団」も活動を開始し、日本は混乱状態になる。しかし、国際警察連合「梁山泊」や国連直属の特務機関NERV、さらには地球の守護神として現れた「ガメラ」の活躍により人類の脅威は駆逐され、戦乱の中心地であった日本にも平和が訪れる。

その中で日本政府は被災地復興と脅威への対策のため、特殊重機「レイバー」を官民に問わず導入する。しかし、そのレイバーを使った凶悪犯罪も発生し始めたため、日本政府は対レイバー犯罪の専門機関、通称「特車二課」を設立し対策に当たる。

その後も日本では、世界初となるVRMMOゲームにて発生した「SAO事件」や、バグスターウイルスの大量発生により起きた「Oデイ」など、社会を揺るがす事件が起きつつも、表面上は平和を保たれていた。

しかし、忘れ去られた過去の亡霊によって、その平和が今、崩されようとしているのであった。

目次

プロローグ 1	1
プロローグ 2	9

プロローグ 1

浅間山山中、夜。

低気圧の影響により発生した雲の下、急斜面の道路を等間隔に置かれた街頭が照らしている。

その中を、1台のトラックが走っていた。

乗っているのはかつてゲッターロボに乗り、地球外生命体インベーターや地球の地下に潜む恐竜帝国との戦いを勝ち抜いた巴武蔵と、その後輩でありゲッターロボの予備パイロットであった車弁慶である。

ハンドルを操作していた武蔵が口を開く。

武蔵「まったく、なんだって隼人は今更こんなものを取りに行かせたんだ？」

そう言いながら、武蔵はミラー越しにちらりと荷台の方を除く。2人はかつての仲間であり、今自分たちが所属している特殊機関NASARの指令である神隼人の命令で、早乙女研究所に行ってきた帰りであった。

目的は、研究所に残された全てのゲッター炉心の回収である。

とはいっても、早乙女研究所は10年前に所長であった早乙女博士が起こしたテ

口、通称「早乙女の乱」によつて壊滅状態であり、まともに使えるゲッター炉心は2つしか残されていなかった。

武蔵の問いに、助手席で写真を眺めていた弁慶が答える。

弁慶「例の新型ゲッター、アークっていったか？アレの起動に必要ならしい」

武蔵「NASAの本部でも、ゲッター炉心の開発は進んでいるだろう？それに何より、旧式のゲッター炉心は国際条約で使用が禁止されている。そんなものを持ち出して本当にいいのか？」

弁慶「さあな。だが、そんな危ない代物だからこそ、隼人も俺たちを向かわせたんだろうさ。何せ、俺たちはあの10年前に起きたことの当事者だからな」

そう言うと、弁慶は写真を持っていた手を下げ、視線を宙に漂わせる。

写真には、若かりし頃の自分と、共に激闘を潜り抜けた仲間たち、そして自分たちを集め、導いてくれた早乙女博士の姿が映っていた。

そんな弁慶の姿を見て、武蔵は彼の写真を持っている方の手をはたき、捨てさせようとする。

弁慶「あ、おい！何するんだよ！」

武蔵の行動に、弁慶が抗議する。

武蔵「捨てちまえよ、そんなもん！」

弁慶「できるか！そんなこと！」

武蔵「過去に縛られるなよ弁慶。俺たちには今、やるべきことがある」

弁慶「縛られてるって…。あんた、それでいいのか!? 10年前に死んでいった博士や竜馬にも、同じことが言えるのか!？」

武蔵「いいから忘れろ！俺はそうした！」

弁慶「俺よりも、あんたの方がゲッターには長く乗っただろう!? そのあんたが、竜馬や、博士のことを考えてやらんでどうする!？」

弁慶がそう叫んだ瞬間、突如「ドオオオン！」という轟音が鳴り、車体が大きく揺れる。

武蔵「うおおおつと！」

武蔵が叫びながらハンドルをさばき、トラックは横転を免れるが、何か大きい重量のものが荷台に乗ったようで、速度が落ちていく。

弁慶「くそっ！何が起こりやがったんだ!？」

そういいながら、弁慶がトラックの天井を開き、荷台に目を向ける。するとそこには、予想外のものが乗っていた。

弁慶「バカな…！ゲッタードラゴンだと!？」

かつて早乙女博士がゲッターロボの後継機として開発したロボット、ゲッタードラゴ

ン。それがいま、トラックの荷台に取りつき、コンテナを破ろうとしていた。

武蔵「誰が操縦しているかわからんが好きにやらせるか！ 弁慶、運転代われ！」

弁慶「了解！」

そういうと、武蔵は運転席の後ろに開いたドアの中に入っていき、弁慶がハンドルを握る。

荷台では、ゲッタードラゴンがコンテナを破り、中にあったゲッター炉心を持ち出そうとするが、突如現れた赤い腕のパンチを顔面に受け、それを阻止される。

ドラゴンを阻止したのは研究所から炉心ごと回収してきたゲッター1で、隔離倉庫にあったことから比較的破損が少なく、操縦にも問題はなかった。

武蔵「旧型機ではあるが、それでもお前を阻止するくらいの力はあるぜ！」

武蔵はゲッター1のкокピットでそう叫ぶと、レバーを操作してもう一発ドラゴンの顔面にパンチをお見舞いする。

パンチを食らってよろけるドラゴンだが、すぐにゲッター1に襲い掛かり、取っ組み合いの状態になる。

本来であればゲッター1の10倍のパワーを持つゲッタードラゴンが圧勝するはずだが、意外にも両者のパワーは拮抗する

武蔵「ゲッタードラゴンの割にはパワーが無いな！ さては炉心を積んでやがらねえと

見た！」

そういうと、武蔵は組み合ったドラゴンの顔面に頭突きを入れる。しかし、ドラゴン
はかたくなに手を放そうとせず、ずっと組み付いてくる。

武蔵「くそっ、しぶとい野郎だ！」

武蔵が忌々しげに叫ぶと、不意にトラックを運転していた弁慶から通信が入る。

弁慶「先輩！そいつの目的はもう一つの炉心だ！」

武蔵「なんだと!？」

そういつて武蔵がモニター越しにドラゴンを見る。よく見るとドラゴンの胸元が開
き、そこから伸びたコードがトラックに積んであった炉心に伸び、接続されている。

武蔵「くそっ！させるか！」

武蔵はそう言うのと、ドラゴンに膝蹴りや頭突きをくらわすが、ドラゴンはひるみもせ
ず、炉心の回収を続ける。

そして胸の中に炉心を回収すると、組み合っていたゲッター1の腕を放し、ウイング
を展開してその場から離脱する。

武蔵「逃がすか！トマホークブーメラン！」

武蔵は空中にいるドラゴンめがけて、ゲッター1の肩から射出されたゲッタートマ
ホークを投げつける。

トマホークはドラゴンの脇腹に命中するが、すぐさま分離されてしまい、炉心を格納した部分に当たるドラゴン号は高速で飛び去ってしまった。

武蔵「ちっ！逃がしたか！」

弁慶「どうする先輩!？」

弁慶の問いに、武蔵はすぐさま答える。

武蔵「お前はそのままN A S A R本部まで行ってこのことを隼人に伝えろ！俺はこのまま奴を追う！」

弁慶「分かった！」

弁慶がそう返事をした途端、

隼人「その必要はない」

と、トラックとゲッター1のkokopittoに通信が入る。

相手はN A S A Rの司令、神隼人だった。

武蔵「隼人！お前、この状況を見ていたのか!？」

隼人「トラックのセンサーに異常があったのでな。搭載されたカメラで見させてもらった」

弁慶「しかし隼人、追わなくてもいいとはどういうことだ？」

隼人「もし、今無理に奴を追いかけて、そのゲッター1に搭載された炉心も奪われて

は本末転倒だ。まずは1つ、確実に手に入れたい」

武蔵「しかし、あの炉心を放置すれば何が起きるか分からんぞ！それこそ、10年前のようなことにもなりかねん！」

隼人「だからだよ、武蔵。その何かが起きた時のための備えとして、そのゲッター1に搭載された炉心が必要なんだ」

隼人のその言葉に、武蔵は疑問を投げかける。

武蔵「隼人：お前、この先に何が起こるかわかるっていうのか？」

隼人「完全にはないが、予想はついている。そしてそれを起こす元凶についてもな」
武蔵「教える隼人！これから何が起こる!?お前は何のために動いている!？」

武蔵がまくしたてるように問うが、隼人はあくまでも冷静に答える。

隼人「ここで話せることではないんでな。本部についてからじっくり話してやるから、まずは2人とも帰還しろ。いいな」

そう言うと、隼人は通信を切った。

武蔵「お、おい隼人！：：：つたく、こういうところは全く変わってないな」

弁慶「そう言うなよ先輩。帰ってから話すとは言ってるんだ。まずは本部へ行こう」

武蔵「そうだな。今そつちへ戻る」

そういうと、武蔵は一度通信を切り、ゲッター1のコクピットとトラックの運転席を

接続する。

武蔵（これから一体、何が始まるってんだ……。いやな胸騒ぎがするぜ）
脳裏にそんな思いを浮かべながら、武蔵は運転席へと戻り、N A S A R本部へと向
かってトラックを走らせた。

この一連の出来事が、やがて始まる世界最後の日の序章となることを、武蔵も弁慶も
まだ知らないのであった。

プロローグ 2

東京湾海上、大戸島沖、夜。

夜の闇と静寂の中に、一隻のクルーザーが浮かんでいる。

その甲板には、ぼろぼろの白衣を着て、白いひげを蓄えた一人の老人が、何かを待つように立っていた。

やがて、その老人のもとに一機の赤い戦闘機がやってくる。

それは先ほど、浅間山山中の道路で武蔵と弁慶の元からゲッター炉心を奪って離脱したドラゴン号であった。

ドラゴン号はクルーザーの隣に静かに着水すると、コクピットハッチを開く。

それを見て、老人——早乙女博士はにやりと笑い、クルーザーからドラゴン号のコクピットへと乗り込んだ。

早乙女博士「フフフ…。これで始められる」

そういいながら早乙女博士はコクピットのハッチを閉じ、計器を操作していく。そして最後に、出力の制限をなくす赤いボタンを自らの拳で叩き、先ほど奪ったゲッター炉心の出力を臨界点まであげていく。それと同時に、ドラゴン号は水中に潜っていった。

そして、東京湾の地下深くに潜む、「ある生物」へと迫っていく。

その生物の元まで行くと、早乙女博士は出力レバーを一気に最大まで引き上げた。急上昇したゲッターエネルギーの緑色の光に包まれながら、早乙女博士は叫ぶ。

早乙女「愚かなる人類よ！今こそ全てが終わるとき！この場から、世界最後の日を始めようではないか！フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

その瞬間、ドラゴン号は深泥色の発行と共に爆発し、早乙女博士もろとも巻き込んでいった。

同じころ、東京湾の埋め立て地にある特車二課基地では、第二小隊の隊長、後藤喜一が1人防波堤に腰をかけて夜釣りを楽しんでいた。

本来であれば今日は夜勤で、まだ職務時間中なのであるが、日本政府の国営事業「バビロンプロジェクト」の最中に起きた事件を解決して以降、レイバーを使った凶悪犯罪の数も減つたため出勤がなく、おまけに部下たちが自分よりも職務を忠実に全うしてくれているのでかえってやる事がなくなり、居眠り防止と気分転換もかねてこうして釣り糸を垂らしに来たのだ。

とはいっても、なかなかヒットはなく、結局のところ暇を持て余していることに変わりはない。その証拠に、自然とあくびまでしてしまう有様である。

これはいかんと考えた後藤は制服の胸ポケットからタバコを取り出し、一本口にくわえて火をつける。

そしてゆつくりと口から紫煙を吐き出しながら、

後藤「平和だねえ」

と、ひとり呟いた。

自分たちの出番は常に市井の人が危機にさらされるときとなるので、こうして出番がないのはいいことなはずなのだが、いかんせん眠気との戦いとなる夜勤の時にこうもやるべきがないと辛いというのが本音だ。

それから数回、紫煙を吐き出し吸っていたタバコを灰にすると後藤は火を消し、吸殻を携帯灰皿にしまう。

後藤「さーて。そろそろ戻らないと南雲さんに怒られちゃうし、引き上げますか」

そういつて、竿の片付けをしようとした後藤は足元が小さく揺れていることに気付く。

後藤「お？地震か？」

そう言いながら海の方を見た後藤は、遙かかなたの海が小さく、緑色に発光しているのを目撃した。

後藤「なんだあれは…？」

光が気になり、後藤は目を凝らすが発光は一瞬だったらしく、海はもとの静けさを取り戻していく。

それでも何か異常を見つけようと目を細める後藤に、後ろから声がかかる。

南雲「第二小隊の隊長ともあろう人が、職務を投げ出して夜釣りとはいいご身分ね」

後藤「な、南雲さん……」

後藤が振り返ると、そこには特車二課第一小隊の隊長、南雲しのぶが不機嫌な顔をして立っていた。

後藤「いや、夜釣りをしていたことは事実だけどね、海がさつきこう、パアーツと緑色に光ってね？何か異常だと思って見てたんだ。本当だよ？」

南雲「そんなこと言って、結局はサボりに来たんじゃない？」

後藤「本当だって！俺が南雲さんに嘘ついたことある？」

南雲「片手で数えきれないくらいはあるわね」

南雲の言葉に、後藤は言い返せなくなってしまう。この前のバビロンプロジェクトの事件の時も、南雲に内緒で捜査課の刑事と独自に犯人を追っていたので旗色が悪い。

南雲「まあいいわ。それよりも、本庁に提出しなきゃいけない報告書が山ほどあるの。半分は私がやっておいたから、あとは後藤くん、お願いね」

後藤「ええ」

南雲「今までサボってたんだからそれくらいやりなさい！明日の朝まで頼むわよ」
そう言うと、南雲は基地の中へ戻っていく。

後藤「あ！ちよつと南雲さん！…はあ。ここからは休憩なしだな」

後藤はそう言つてため息をつくつと、釣り竿の片付けに入る。

道具をまとめ、防波堤から立ち去ろうとしたとき、海の方から「ズウウウン…！」と、
何かが動くような気配を感じて足を止める。

後藤「…何かの前触れじやなきやいいんだけどねえ」

そう言うと、後藤は足早に基地の中へと戻つていった。

早乙女博士が散り、後藤が緑の光を見た海の底では、眠りについていたある生物が目
を覚ましつつかつた。

それがやがて進化し、世界に最後を呼ぶ究極の破壊神となることを、早乙女博士以外
にこの時、知るものはなかったのであつた。